

古代における商の一端

——日本靈異記を通して——

秋 山 義 一

一、はじめに

交易という名称で、商の原始的形態であるところの交換現象が行われたことは、古く魏志倭人伝（紀元三世紀頃）に見える。

国々有市、交易有無、使大倭監之。

の記事で知ることが出来るが、それ以前に既に市が存在したであろうことは、帝王編年記が伝える応神天皇（二二〇一年）の

十年乙亥。始立輕市。⁽¹⁾

によっても、ほぼ知ることが出来るが、この記事が果して正鵠なものであるかどうかについては、疑問もはさまれようが、それはとにかくとして、市の発生が自然発生的なものである限り、この時代において既に存在したであろうことは想像に難くない。

市が集道であるか、又五十路の義であるか、或は齊の転訛のイチであるかどうかについては今少しく検討を加へる

余地があると思うが、常陸風土記に見ゆる

所謂高市。自_レ此東北二里密筑里。村中淨泉。俗謂_二大井_一。夏冷冬温。湧流成川。夏暑之時。遠邇鄉里。酒肴齎_二寶_一。男女集合。休遊飲樂。其東南臨海浜（石決明、棘甲贏。魚貝等類。甚多）。西北帶_二山野_一（椎櫟榲栗生。鹿猪住_レ之）。凡山海珍味。不可_二悉記_一。⁽²⁾

の記事から察すると、常陸国の高市というところは、密筑里という場所で、夏涼く冬温かく、清泉が湧いて川のように流れるので、ここに男女が集って集会し、又ここにおいて山海の珍味が収穫出来たというので、これによれば、市が自然発生的なものではあることは十分推察することが出来るので、こうしたところから、そこで自然的に余剰物資が交換されたであろうということは、出雲風土記の朝酌促戸渡の条に

市人四集自然成廛矣。⁽³⁾

とあることによっても知ることができよう。

このように、交易は市を媒体として成立した。そしてこの交易がさかんになるにつれて、余剰的物資としての価値にとぼしいと考えられた物資にも、自然に使用価値としてのアタヒという考え方が発生した。顕宗紀（四八四年）の室寿の歌詞の中に

吾儔者。旨酒餌香市不_二以_レ直買_一。⁽⁴⁾

とある。直で買えないというのは、使用価値があっても、交換出来ないということの意味したものではなからうか。

次の斉明紀五年（六五九年）に見える

又高麗使人、持_二麗皮一枚_一、称_二其酒_一曰、綿六十斤。市司咲而避去。

によって、漸くここに交換価値としてアタヒというものが認められたものであろうか。

このようにして。物と物との交換よりはじまったものが、交易という形態を経て商への形成と進んだものと考えられる。たまたまこのときに、中央集権国家の確立、奈良眞郡という、大事業がほぼ完成しようとしたので、又武蔵国秩父における自然銅の発掘、これによる貨幣が経済社会への導入、ひいては商形態の確立を促進し発展させたものといふことができよう。

私はここにこの商への発展を仏教説話を通してながめて見たい。奈良朝という時代Ⅱ聖武朝をその絶頂として仏教思想を以ていゝどられた時代であつて、その当時のすべての社会現象を仏教信仰と切り難して考えることが難かしい。

日本靈異記というのは本来は日本国現報善惡靈異記と呼ばれ、諾楽右京薬師寺の僧景戒が延暦六年（一四四七）頃から弘仁十四年（一四八三年）頃にかけて選述されたもので、仏教説話として、我国で最も古いといわれ、これは僧景戒が述べているように、因果応報をとき、功德を積むことによって、仏罰を免れ、現報を受けることが出来るというのであるが、この中に当時の商の状態を知ることが出来ると思う記事が多いので、ここにはこれを中心として考えて見たいと思う。

- 註 (1) 帝王編年紀卷五（新訂増補国史大系第十二卷 六八頁）
(2) 常陸風土記（寧楽遺文下巻 文学編 七九六頁）
(3) 出雲風土記（同右書 八〇八頁）
(4) 日本書紀卷十五（新訂増補国史大系）第一卷 上 四〇三頁
(5) 日本書紀卷二十六（新訂増補国史大系）第一卷 下 二七一頁

二、アタヒ観念の形成

アタヒという観念について、使用価値、交換価値と二つの概念があつたと考えられるが、曩に述べたように、顕宗

紀に見ゆる「不_レ以_レ直買_一。」によつてこのとき売買という觀念が発生していたことを知る事が出来るが、これはむしろ交換価値というよりは使用価値を知ったという段階ではなからうか。

斉明紀五年の記事の羅皮一枚と綿六十斤とを交換するということは、交換価値ということを表わしているものといふことができよう。和銅四年五月巳未に、

以穀六斗。当_二錢一文_一。令_二百姓_一交_レ關_レ各得_二其利_一⁽¹⁾

とされているが、これは交換価値というような、貨幣価値を定めたものであらうと思われる。日本靈異記の上巻に

「続_二龜命_一放生得_二現報_一龜所助縁第七」⁽²⁾の中の「檀越先運量_レ価」とあるのは、交換価値をさだめることを示したものと考えられる。この記事は百済の人禪師弘済が百済の乱れた時百済を救うため日本に遣わされたときとされている。そうであればこれは斎明紀に見えるのと大体において符合するので、前述した斎明紀五年の記事とあわせて、この頃にアタヒに交換価値という觀念が生れたものであらうと思われる。

而して今昔物語において例えば「婆羅門僧正為_レ值_二行商_一從_二天竺_一來朝語第七」⁽³⁾のように本来ならば「会」と書くべきところを「值」と字を用いて、同意語として用いること、又、同じく卷第廿七の目錄に「人妻死後成_二本形_一值_二旧夫_一語第廿四」とあるが、本文の標題においては、「人妻死後成_二本形_一會_二旧夫_一語第廿四」として、いるように、値を會と同意語として用いている例が十七例に及んでいる。このように古代において、同じように使用されていることは、

「アタヒ」は「アタ」と「アヒ」の合成語、「アタ」は仇敵をも意味し、当時の語根であり、相互に一对一で匹偶するのが原義。「アヒ」は合う意。従つて、「アタアヒ」はぴったり一对一で合う意。それが atahi—atahi という音韻の融合の結果、アタヒとなる。⁽⁴⁾

と述べられていることをあわせ考えて見ると、値は「丁度あう」という意に解せられ、交換価値を示すことになるのである。

そして後同じく中巻の「依_レ不_レ布施_二与_中放生_上而現得_二善惡報_一縁第十六」に次のような記事が見える。

誂釣主曰 此_レ嫌欲_レ贖 釣主不_レ免 呵々至_レ心 教化之言 能人作寺 何甚不_レ脱 乃脱之言 充十貝直 欲_二米五斗_一 如_レ乞而贖⁽⁵⁾

このことは蠟（かき）十個と米五斗とを交換したことであつて、又同じく「憶_二持心経_一女現主閻羅玉闕示_二奇表_一縁第十九」にも

猶忍問 経直欲_二幾_一何 答別_レ卷直欲_二錢五百文_一 随_レ乞而買 於是乃知⁽⁶⁾

とあつて、梵網経二巻、心経一卷を巻ごとに錢五百文に買ったことをいうているのであるが、このようにして、奈良朝以前において既に、アタヒが交換価値を示す觀念として形成されていたものと考えることができる。

註 (1) 続日本紀卷五（新訂増補国史大系第二卷四五頁）

(2) 日本靈異記上巻（群書類従第二十五輯雜部一、二八頁）

(3) 今昔物語集本朝之部 卷十一（新訂増補国史大系第十七卷十七頁）

(4) 拙稿「わが国における商の形成」（横浜商大編集第四巻第一号六九三）

(5) 日本靈異記中巻（群書類従第二十五輯雜部一、五十八頁）

(6) 同右書中巻（群書類従第二十五輯六十一頁）

三、市の発展

奈良朝以前においてすでに存在した市としては、輕市、藤原宮東西市、餌香市、阿斗桑市、海柘榴市、又、阿倍

市等⁽¹⁾である。

一、輕市

これについて前に述べたとおり、帝王編年記、応神天皇十年（二七九年）に見ゆるもので、これは後にいう藤原宮の東西市と同じように、政治の中心地に建てられたものであろう。応神天皇は輕宮に居住せられたのであって、天皇への貢納物が売りさばかれるのは、皇居の近傍と考えられるので、当然輕市にそれに当るものであろう。

二、藤原宮の東西市

これは文武天皇の大宝三年（七〇三年）⁽³⁾にたてられたものであって、藤原宮の中に所在したのである。これは文博横井時冬の述べる。

天皇の都城として百官の集会する地に商市の名あるが如き、これ其例なり。

のように、政治の中心に市をたつというのであるが、これらは政治の中心地の移動と同時に廃止せられたものと考えられる。

三、餌香市

雄略紀十三年（四六九年）に見ゆる次の一節にはじまる

天皇使^ミ齒田根命^ニ、資材露置^ニ於餌香市^ニ辺橋本之上^ニ。⁽⁴⁾

がこれで、又これを隔つる十七年、顕宗紀（四八四年）の室寿の歌詞に

吾儷名。旨酒餌香市。不^ニ以^レ迄買^ニ。⁽⁵⁾

にも見え、又称徳紀宝龜元年三月（七七〇年）に、

西市員外令史正八位下民使比登日理、權任^ニ会賀市司^ニ。⁽⁶⁾

として臨時に市司をおかれたものの如く、おそらくは奈良朝においても相当盛んなもので、現在の大阪府柏原市あたりで石川と大和川の合流点あたりかと思われる。

四、阿斗桑市

敏達紀十二年冬十月の条に

乃營_三館於_二阿斗桑市_一使住日羅⁽⁷⁾

に見えるのが初見で、他には記録がないようであるが、この位置については、はっきりとしないが、現在の大阪府八尾市植松とする説、又同じく八尾市の跡部とする考え方もあるようであるが、今これを明らかにすることはできない。

五、海柘榴市

これは武烈紀に出て居り、古い市の一つと思われる。この市のことは万葉集に見える。

海石榴市之八十衢爾之平之結紐乎解卷惜毛⁽⁸⁾（つばいちの八十のちまたにならし結びし紐をとかまくをしも）

これによって当時非常に盛えた市と考えることができる。現在の桜井市で三輪山の南西麓にあたるといわれる。

六、阿倍市

万葉集に

春日藏首老歌一首

焼津辺吾去鹿齒駿河奈流阿倍之市道爾相之児寺羽裳（焼津べにわが行きしかばするがなる阿倍の市ぢにあいし子らはも）

とあるだけで、市趾ははっきりしないが静岡市安倍町附近かといわれる。

以上述べたように奈良朝以前より市がさかえたことを知ることが出来るが、日本霊異記に見えるのは、京の市、灘

波市、小川市、深津の市、紀の市となっている。

(1) 京の市 ここでは東の市についてのみ記され、前述の「憶持心経」女現主閻羅王闕示「奇表」縁第十九に⁽¹⁰⁾
至三日朝猶故欲往京之東市 往居市中而終日待 待人不来 但賤人 從市東之門 而入市中売経街
売以告之言 誰経買乎。

(2) 灘波の市

国知識為四恩作絵仏像有驗示奇表縁卷第卅五に⁽¹¹⁾
行其難波 徘徊市帰 時見担篋之在持上 即聞種々生物之声 国篋中而出
と見えている。

(3) 小川市

力女掬力試縁第四として⁽¹²⁾
聖武天皇御世 三野国片泉郡小川市有力女 為人大也 名為三野狐 力強当百人力 住小川市内 恃己
力凌弊於往還商人 而取其物為樂
とある。

(4) 深津市

欄腰目六等独脱以所之示靈表縁第廿七に白壁天皇世⁽¹³⁾ 宝龜九年戊午冬十一月下旬 備後国葦田郡大山里人 品知
坂人 為買正月物 向日国深津郡於深津市而往
とある。

(5) 紀の市

令盜_二絹衣_一歸_二願妙現菩薩_一修得_二其絹衣_一緣第卅四に、⁽¹⁴⁾

紀伊国安諦郡総部寺之前 昔有_二一家_一 絹衣十盗人所_レ取 憑_二妙見菩薩_一国祈願之 絹売_二木之市人_一也
とあるのがこれである。

奈良朝にこの外にも多くの市があつたことは奈良朝以前の市の状況より考えて想像に難くないところであるが、これについては後に述べるように、これらの市が当時における流通経済圏として考えられ、従つて主としてその方面の説話が蒐集されたのではなからうか。而うして、難波の市については、令によれば当時特に摂津職がおかれて、その市の管理に当られたものであつて、当時の盛況が想像せられるが、続日本紀桓武紀延暦三年五月に見ゆる次の記事からすれば、

癸未。摂津職言。今月七日卯時。蝦蟇_二二万許_一。長可_二四分_一。其色黒斑。從_二難波市_一南道。南行地列可_二三町_一。
隨_二道南行_一。入_二四天王寺内_一。至_二於午時_一。皆悉散去。⁽¹⁷⁾

即ち四天王寺の北を北行したところと思われるので現在の玉造かと想定せられる。

次に小川市については、今の岐阜県各務原市古市場かと思われ、長良川による水路の利用が多かつたことかと考えられる。紀の市については、有田川のほとりということから推して今の有田川下流金屋の附近かと考える。(金屋には現在市場という字名がある。)更に深津の市は岡山県福山市宮前かと想定されている。

そこで今この市趾よりして次の如く考えることが出来る。即ち京の市は中央市場として難波、深津市は港灣市として、小川市、紀の市は仲継商業の市としてさしかえたものであらう。

更には前に述べた京(奈良京)の東西市において振売りが行われたこと、又生物が売買されたこと、又盗品も市場に出回つたことを知ることが出来る。小川市における力女が現れて商人からかすめ取つたということは、雑律に見える

諸在市及人衆中。故相驚動令_レ擾乱_一者。杖八十。以_レ故殺_一傷人_一者。減_二故殺傷一寺_一。因失_二財物_一者。生_レ贓論。其誤驚殺_二傷人_一者。從_二過失法_一。⁽¹⁸⁾

とを考えあわせて見るとき、市場における擾乱ということを通して当時の地方の世情も併せ知ることができるのではなからうか。

- 註
- (1) 文学博士西村真次著日本古代経済交換篇第二冊市場二九頁
 - (2) 帝王編年記卷五(新訂増補国史大系第十二卷六八頁)
 - (3) 扶桑略記第五(新訂増補国史大系第十二卷七三頁)
 - (4) 日本書紀卷十四(新訂増補国史大系第一卷 上 三八二頁)
 - (5) 日本書紀卷十五(新訂増補国史大系第一卷 上 日本書紀四〇三頁)
 - (6) 続日本紀卷三十(新訂増補国史大系第二卷三七五頁)
 - (7) 日本書紀卷廿(新訂増補国史大系第一卷 下 一一〇頁)
 - (8) 万葉集第一二卷(日本古典文学全集 6 万葉集三、二七九頁)
 - (9) 万葉集第三卷(日本古典文学全集 4 万葉集一一五九頁)
 - (10) 日本靈異記中卷(群書類従第二十五輯雜部一、六一頁)
 - (11) 日本靈異記上卷(日本古典文学全集 70 日本靈異記上卷一五四頁、この項は群書類従本には欠けている。)
 - (12) 日本靈異記中卷(群書類従第二十五輯雜部一、四七頁)
 - (13) 日本靈異記下卷(群書類従第二十五輯雜部一、一〇二頁)
 - (14) 日本靈異記 下卷(日本古典文学全集 70 日本靈異記上卷一五二頁、この項も群書類従本には欠けている。)
 - (15) 文学博士西村真次著日本古代経済交換篇第二冊市場六六頁)
 - (16) 令義解卷一職員令(新訂増補国史大系第二十二卷五九頁)
 - (17) 続日本紀卷三十八(新訂増補国史大系第二卷四九九頁)
 - (18) 律逸文雜律(新訂増補国史大系第二十二卷一六一頁)

○ 尚市の所在地については文博吉田東伍著大日本地名辞書、文博西村真次著日本古代経済交換篇第二冊市場を参照のこと。

四、出挙の横行

出挙は春種まくときに稲を貸付けて、秋収穫の時にこれを返還させるという、元来社会福祉的な貧民救済の目的でもっておかれたもので、政府官衙がおこなう公出挙と貴族、私人でなされるもの私出挙に分れる。後に財物出挙をなすものもあって、稲粟出挙と財物出挙ともするのである。

ここでは私は主として、私出挙についてのみを取扱うこととしたい。

私出挙について、雑令にも示すとおり、私契によっておこなわれ、当事者間の合意にもとづくものであって、財物出挙は六〇日、稲粟出挙は一年を断りとなし、前者は六〇日毎に元本の八分の一をこえてはならず「八断」(一六ヶ月)を経て収めた利息が元本の倍に達したら、たとえ返済がおくれても、それ以上の利息をとってはならず、又後者は「一断」(二年)で、元本の倍(一〇割)をこえてはならぬとされたのである。⁽¹⁾

ところが天平九年九月に至って私人の出挙稲を禁じている。これが農民の困苦をも顧みず、利を求めて出挙したところによるものであろうが、⁽²⁾この禁断はなかなかまもられなかったようで、天平勝宝三年九月の太政官符には、京畿の百姓が穎稻を銭財といつわって出挙するものがあるので、これをかたく禁ずる旨が述べられている。⁽³⁾このように再度にわたって禁断せられても、実行されず、事実天平宝字五年二月戊午に

越前国加賀郡少領道公勝石。出_三挙私稻六万束。以其違勅。没_三利稻三万束。⁽⁴⁾

となっている、しかし靈異記によると、稲を出挙している例が見られるので、いくらきびしくてもまもられなかったことと思われる。

そして折角出挙をうけたものでも、返済することが容易でなかったらしく、靈異記には返済出来ずして死んだ後、

牛の身をうけて、返済にあたったという説話がみえている。即ち靈異記中巻に

己^レ用^ニ其寺物^一作牛役縁 第九

大伴赤麻呂者武蔵国多磨郡大領也。以^ニ天平勝宝元年己丑冬十二月十九日死^一以^ニ三年庚寅夏五月七日^一生^ニ黒斑犢
自負^ニ碑文^一矣 採^ニ之斑文^一謂 赤麻呂者 檀^ニ於己所造寺^一 而隨^ニ恣心^一 借^ニ用寺物^一 未^ニ報納^一之死亡焉為^レ償^ニ
此物^一故受牛身^一者也⁽⁵⁾

と見え、又同じく中巻に寺院の息利の酒を貸用して償わずして死亡したので、牛になってこれを償うという記事がで
ている。

このようにして、出挙して返済せざるものに対してかたく戒めるとともに、同じく上巻には

非理奪^ニ他物^一為^ニ惡行^一受^レ報示^ニ奇事縁^一 第卅

或貸^ニ八両綿^一 強倍^ニ十両^一徵 或貸^ニ小斤稻^一而大斤取 或人物強奪取 或不^レ孝^ニ養父母^一不^レ恭^ニ敬師長^一 不^ニ奴
婢^一者罵慢 如^レ是罪故 我身雖^レ少而卅七鉄釘立 每九万段鉄鞭打迫 痛感苦感 何日免^ニ吾罪^一 何時得^ニ安身^一也⁽⁷⁾
即ち八両の綿を貸して十両に倍して返済させ、小斤で貸して三倍に当る大斤で返させるような非道なことをしたの
で、死んで鉄の釘をたてられ、九百段の鉄の鞭で打たれ、とても痛くても苦しいが、どのようなことをすればこの罪
を免れることができるであろうかと述べているのであるが、このようなことは上巻の第二十三に「凶人不^レ敬^ニ養孀房
母^一以現得^ニ要死^一縁⁽⁸⁾として、生母に稻を貸して、償えないので、これをせめ苦しめたので、遽に狂氣して、家も焼け、
遂に飢のため死んだ学生のことがかかれており、又下巻第二十六にも「強^ニ非理^一以徵^レ債取^ニ多倍^一而現得^ニ惡死報^一縁^一」
として前と同じように、貸す日に小斤で与え、償う日には大斤を用いる。酒には水をかえるというような非道なこと
をし、惡報を受けるとし、たとえ物を負うていても、非理に徴収しようとするれば、かえって馬牛となって、更に償う

人につかわるるが故に過ぎて徴収を迫ってはならない」といましめている。

そしてこのような出挙が寺院よりも多くなされていることである。僧侶が出挙することについては僧尼令に

凡僧尼不得私畜園宅財物及与販出息⁽¹⁰⁾。

と禁じているが、寺院に対してそのような規制はなかった。寺院において、多くの出挙がなされたことは、東大寺正倉院に所蔵する文書の中に月借錢解⁽³⁾という当時の写経生の借用証が七十三通にもぼって、現存していることでも知ることができるし、又前に述べたところにも、そのことが見えているし、又中巻には「貸用寺息利酒不償死作牛役之償債縁第卅二」⁽¹²⁾によつて知ることができる。ここで、当時財物出挙の中に金銭のほか、酒があつたということ、特に注意しなければならないと思う。酒についてはすでに顯宗紀にそのことが見えており、又釈日本紀によれば、高麗人が餌香市に來住して酒を醸造して、時の寺人が競つてこれを飲んだと見えているので、高麗人によつて、日本に伝えられたもので、寺院においては薬料としてつくられたようである。

又僧侶が在俗生活に入れば、錢を貸すことは黙認せられたものの如く、靈異記下巻に、「所門誦持方広大乘汎海不溺縁第四」⁽¹⁴⁾として、奈良京の一人の大僧が俗について、錢を貸し妻子を養うていたが、方広經典を誦していたので、海に溺れないということが述べられている。このような身が僧侶でありながら、在俗生活として当時の一般人民とかわらないような生活をしていたということは、やがては延喜十四年二月三卷清行が封事十二箇条を時の醍醐天皇にたてまつつたように僧侶の腐敗、即ち

皆は無漸之徒也。蓄妻子。營室家。力耕田。行商倆。

又、「請禁諸國僧徒濫惠」として、

此皆家蓄子。口啖腥膻。形似沙門。心如屠兒。況其尤甚者。聚為群盜。窃鑄錢貨。不畏天刑。不顧仏律。⁽¹⁵⁾

て嘆かしめるような事態に立ち至らしめた原因の一ということが出来ようか。

又後に述べるように、奈良の京の大安寺のほとりに住む檀磐島という人が大安寺の商錢を借りて遠く敦賀まで出かけたということは、寺院が当時いわゆる商業金融にまで乗り出していうことを示すものでなからうか。勿論この記事で推測することは難かしいが、東大寺のように、写経生に多額の金を貸しているという事実は、こうした金融もあり得たことを暗示しているといえるのではなからうか。

- 註 (1) 令義解卷十雜令 (新訂増補国史大系第二十二卷三三六頁)
(2) 続日本紀卷十二 (新訂増補国史大系第二卷一四六頁)
(3) 類聚三代極卷十四 (新訂増補国史大系第二十五卷四〇三頁)
(4) 続日本紀卷二十三 (新訂増補国史大系第二卷二七七頁)
(5) 日本靈異記中卷 (群書類從第二十五輯雜部一、五三頁)
(6) 日本靈異記中卷、「貸用寺息利酒」不償死作牛役之償債縁第卅二 (群書類從第二十五輯雜部一、七〇頁)
(7) 日本靈異記上卷 (群書類從第二十五輯雜部一、四〇頁)
(8) 日本靈異記上卷 (群書類從第二十五輯雜部一、三六頁)
(9) 日本雷異記下卷 (群書類從第二十五輯雜部一、一〇一頁)
(10) 令義解卷二僧尼令 (新訂増補国史大系第二十二卷八六頁)
(11) 大日本古文書第三卷第六卷参照
(12) 日本靈異記中卷 (群書類從第二十五輯雜部一、七〇頁)
(13) 釈日本紀卷十二 (新訂増補国史大系第八卷一六七頁)
(14) 日本靈異記下卷 (群書類從第二十五輯雜部一、八三頁)
(15) 封事十二箇条 (日本經濟大典第一卷三三〇頁、三三九頁)
○ 出挙については沢田吾一著奈良時代民政經濟の数的研究第六篇第三十七章商業及び融通等及び文学博士村尾次郎著律令財

五、錢貨の流通

和銅元年における武蔵国秩父郡から自然銅の発掘を契機として、当時の経済社会に貨幣が投入されたのであって、和銅元年二月における、催鑄錢司の設置、又和銅二年八月には当時あった銀錢を廃して一に銅錢を行わしめたこと、和銅四年五月には穀六斗を以て錢一文にあて、又翌五年十月には、旅行者には必らず錢を所持せしめることなどや、つぎばやに發布した政令によって、次第に錢貨を流通していったのである。⁽¹⁾

このことは、仏教信仰の篤かった当時としては寺院に多額の金錢を所蔵せしめた結果となり、天平十九年勘録の法隆寺縁起資財帳⁽²⁾によれば、三万五十二貫八百三十二文という錢貨があり、又大安寺についても同じく大安寺資財縁起帳⁽³⁾によって見れば、六千四百七十三貫八百二十二文ほかに銀錢として一千五十三文を所有していることを示している。しかも大安寺の錢貨については靈異記によれば、中巻の第二十八に貧しい女が釈迦の丈六仏に福分を願って大安寺の錢四貫与えられるというのは、社会福祉方面の使われたことを意味するものであるが、又檜盤島の説話もこれと異なる金融と思う。

このように錢貨が流通するようになれば、当時の貧弱な錢造法であった時代においては、当然のように粗末な私鑄錢も出まわることとは当然で、これに対して時の政府が重刑をもってこれに望んでいる。和銅四年十月に、私鑄鑄に対する態度は峻厳で、私鑄錢犯に対して首犯は斬罪、従犯は没官している。然し重刑をもってしても私鑄錢はなくなり、私鑄錢対策としては奈良朝政府は非常な苦慮を重ねたようである。⁽⁵⁾ 靈異記にその中巻にも「觀音銅像及鷲形示ニ寺表二縁第十七として、⁽⁶⁾ 觀音像が盗人によって盗まれ地におちているので当時の人が、

道俗集言 鑄錢盜 取用无便 思煩而棄

と述べたとかかれていますように当所はさかんに銅像が売られたらしいことは同じく中巻の仏銅像盗人所捕示靈表⁽⁷⁾に顯盜人縁第廿二に一人の盗人があり、生来殺盜を業とし、因果をうけず、常に寺の銅像を盗み帯にして売りあるいたということによっても知ることができよう。

又錢貨の流通奨励策の一として、当時の人民に対する蓄錢の奨励として、叙位を定めたいわゆる蓄錢叙位法である。和銅四年冬十月甲子の記に。

詔曰、夫錢之為用、所以通財貨易有⁽⁸⁾无⁽⁸⁾也。当今百姓、尚迷⁽⁸⁾習俗⁽⁸⁾。未⁽⁸⁾解⁽⁸⁾其理⁽⁸⁾。僅雖⁽⁸⁾賣買。猶無⁽⁸⁾蓄錢⁽⁸⁾者。隨⁽⁸⁾多少⁽⁸⁾。節級叙位。

とある。

こうした蓄錢の令がかえって、錢を隠匿する結果となったのであろうか。錢貨の効用というものがよく知らないものとして、記念品同様に考えられた当時のこととしては当然のことかとも考えるが、靈異記の中巻に出ている「因⁽⁹⁾慳貪⁽⁹⁾成⁽⁹⁾大蛇⁽⁹⁾縁第卅八」のように、聖武天皇の御世に奈良京の馬庭の山寺に僧があつて、命終わる時に弟子に三年の間、室の戸を開くことを禁じた。而して三年経てその戸をあけると大きな毒蛇がいた。その弟子が因を知りて、教化して見たところ、その室に錢三十貫が隠しおさめてあつたという説話である。このような説話は扶桑略記にも出ており、それによれば无空という律師が自分の死後を考え、ひそかに錢を房内の天井上にかくしておいた。そしてこの僧はのことを言及しないで死んでしまった。ところで時の左大臣が、この僧の衣裳が穢れて、自分は錢を隠蔽したがために蛇の身になった。そこでこの錢をもって法華經をうつしてほしい、という夢を見たので、左大臣が早速旧房に行つてさがすと果して万錢があつたがその中に小蛇がいて、人を見て逃げ去つたつというのである。

この説話によって見ても、王朝時代において少からず錢貨が隠匿されていたのではないかと考える。以上述べたように、錢貨というものが、寺院を中心として流通されていたのと推測される。

- 註 (1) 拙稿「奈良朝の錢貨政策」(横浜商大論集第一卷第一号第五六頁)
(2) 法隆寺伽藍起縁流記資財帳(寧楽遺文中卷宗教編三四四頁)
(3) 大安寺伽藍起縁流記資材帳(同右書三六六頁)
(4) 日本靈異記中卷(群書類従第二十五卷雜部一六八頁)
(5) 拙稿「奈良朝の錢貨政策」(横浜商大編集第一卷第一号七七頁)
(6) 日本靈異記中卷(群書類従第二十五卷雜部一、五九頁)
(7) 日本靈異記中卷(同右書六三頁)
(8) 続日本紀卷五(新訂増補国史大系第二卷四六頁)
(9) 日本靈異記中卷(群書類従第二十五卷雜部一、七四頁)

六、遠隔地の交易

交換は最初のうちは行商という形によってはじまり、遠隔地との取引もまた自然のうちに行われたことと考える。

そして陸路の場合は馬によって、海路、河川路の時は船を利用することによって、交易がはじめられていたのではなかろうか。靈異記上巻に見える「无慈心而馬負重駄以現得惡報縁第廿一」⁽¹⁾の河内の瓜売りの人が馬の力にすぎず、重き荷を負はせ、瓜を売りおわればその馬を殺した。そしてそのような馬が数多く、そのために惡報を受けるといふ説話であるが、又このように馬を用いたことは、今昔物語に見え、大和の国より多くの馬に瓜を負せて京に上るといふ記事が見えている。このようにして陸路の場合は馬を利用して商に出かけたことを知るであらう。

次に海路、河川路の場合、船で航行したことが見え、さきに述べた小川の市で一人の力女があつて、市の内に住み、己が力を待み、往過の商人を襲い其の物を取る。そこで愛知の国に一人の力女があつてそれが小川の市内の力女を試みようと思つて、蛤五十斛を捕り船に載せ、小川の市に泊まるということが書かれている。小川の市は長良川を木曾川に出たところにあるので、さほど大きな川とは考えられないが、とにかく船が航行し得たことはたしかであらうと又同じく中巻に「力女示ニ強力ニ縁第廿七」⁽³⁾に尾張国中嶋郡の大須尾張宿弥久玖利の妻のことが見え、これによれば、

然後此嬢至彼里草津川之河津而衣洗時商人 大船戴荷垂遇。

として、草津川（現在未詳）を大船が往来したと述べている。

又海路の交通も後に述べるようにさかんで、はるか遠方にまで、船を乗出していたということが考えられる。和銅五年撰上の帶陸風土記によれば、

壮□漁嬢、逐浜洲、以輻輳、商暨農夫、棹舳舻而往来⁽⁴⁾

これによつて見れば、商人が浜洲から船を乗り出していたことがわかり、海路の交通ということも知ることができ

る。さて当時において、奈良京を中心として、商圈がどの位までのびていたであろう。前に述べた記事からもつてすれば、大和国と京との往来は知ることができるが、その他のことについては、今昔物語に

於伶香山峰、鑿殺盜人語第卅六

今昔、京ニ水銀商スル者有ケリ。年来役ト商ケレバ、大キニ富ヲ財多クシテ家豊カ也ケリ。伊勢ノ国ニ年来通ヒ行ケルニ、馬百余疋ニ諸ノ絹布糸綿米ナドヲ負セテ、常ニ下リ上リ行ケルニ、只小キ小童部ヲ以テ馬ヲ追ハセテ有ケル。⁽⁵⁾

(下略)

とあって、

これによつて伊勢の国と京の間の通商を知ることができる。又遠隔地の取引の代表的のものとしてあげられるのが、前にも一寸ふれておいたが、大安寺のほとりに住む、檜磐島が敦賀まで行商におもむいた説話である。靈異記中巻に、「閻羅王使鬼得^三所召人賂以^二免縁第廿四^一」に檜磐島という人が聖武天皇の御世に大安寺の修多羅分錢卅貫を借り、越前の国都魯鹿の津にゆき交易して帰る途中病になつたので、船をとめおき自分一人家に帰ろうと馬を借りて帰つてきた。途中近江の辛崎に至つてふりかえると三人追つてくる。山城の宇治橋に追いつき、一緒に行つた。磐島がどこに行くかときいたところ、閻羅王の便で、檜磐島を召しにゆく。というので、檜磐島というのは自分で、何で召されるかと訊ねたところ、三人の使がいうのに自分達にさきに汝の家に行つたところ、商にいつて帰つてこないというので、津にまでいった。ところが四王の使がいうのには「檜盤島を召すのはゆるして欲しい。寺の交易の錢を借りて商をしているから。」というので暫らくゆるした。その間に飢えてきたので、食物がほしい。というので、檜盤島がこれに馳走して、牛を献上してゆるされて、九十余りまで長生して死んだ。⁽⁶⁾

そして終り「日本の磐島は、寺の商の錢を受け、閻羅王の鬼の追ひ召す難を免る。」と述べられていることである。これと同じことが、今昔物語にも⁽⁷⁾元亨釋書にも⁽⁸⁾記されている。

ここで大切なことは、大安寺の修多羅分錢を借りて商に出かけたことと、又遠く敦賀まで交易に行つたということである。大安寺の修多羅分錢は、社会福祉的に用いられたことは前にも述べたが、大安寺自体が非常に裕福な寺院にあつたらしく、前述のとおり現在残る二つの資財帳を比較してもまた、奈良京のほかにある寺院と奈良の都をはるかはなれたところにある寺院とではその信仰の対象とてちがつたのではあろう。このように栄えた、大安寺には大磐

若経を誦したり、論議したりする研究組織が存在して、その基本金と見られるものを出挙して、その息利を得てその研究組織活動をさかんならしめたものと考えられる。寺院はこのようにして積極的に交易に協力したのではなからうか。東大寺の月借錢に現在のところでは、すべて生活金融のみと見えるが、おそらくは大安寺と同じように商人の交易のため錢貨を出挙したこともあるのではなからうか。

これで見ると商圈は大和を中心として、伊勢、遠く敦賀までのびている。又当時の市の所在が前述のように靈異記にも見えているので、ここらに大和を中心とした一つの流通圏とでもいうべきものがあつたのではなからうか。元正天皇養老六年（七三二年）九月の条の

九月庚寅。今伊賀。伊勢。尾張。近江。越前。丹波。播磨。紀伊等国。始輸_二錢調_一。⁽¹⁰⁾

として、調庸を錢貨で輸した国について述べていることと思ひ合せ、又文武天皇大宝元年に、
軍寅日。遣_二使於河内。摂津。紀伊国等_一營_二造行宮_一。⁽¹¹⁾

又大宝二年九月に

癸未。遣_二使於伊賀。伊世。美乃。尾張。参河五国_一營_二造行宮_一。⁽¹²⁾

とあるのを見ると、これら広範囲に及ぶ一つの流通圏があつたであらうと考えられる。

さて又多少選述の時代が新しくなるが、曩にも述べた仏教の説教集である今昔物語によれば、「鎮西人、渡_二新羅_一値_レ虎第三十一⁽¹³⁾」として、九州地方の人があきないのため、船一雙に多くの人を乗せ、朝鮮の新羅に渡り、その帰りがけに虎に追いかけられるという物語をのせており、又つづいて「鎮西人。至度羅島語第十二⁽¹⁴⁾」として、同じ九州の人があきないために多くの人を伴つて、見知らぬ国へ旅して、そしてその帰った度羅島に立寄つたということがかかれてい
る度羅島というのは、今でいう済州島である。そうとすれば、この見知らぬ国というのも朝鮮あたりではなからうか

と考える。

このようにして、海外にまでも交易の範囲がのびたことは注目すべきことで、これが一時的な私貿易というものにせよ、当時の商活動の一端を知ることができるのではないか。

- 註 (1) 日本靈異記上卷(群書類従第二十五卷雜部一、三五頁)
(2) 日本靈異記中卷(同右書四七頁)
(3) 同 右 書(同右書六七頁)
(4) 常陸風土記(寧楽遺文下卷七九〇頁)
(5) 今昔物語集本朝卷二十九(新訂増補国史大系第十七卷二〇〇〇頁)
(6) 日本靈異記中卷(群書類従第二十五卷雜部一、六四頁)
(7) 今昔物語集本朝卷二十(新訂増補国史大系第十七卷五六三頁)
(8) 元亨釈書卷第二十九(新訂増補国史大系第三十一卷四三九頁)
(9) 日本靈異記中卷第廿四頭住参照(日本古典文学全集70二四六頁)
(10) 続日本紀卷九(新訂増補国史大系第二卷九四頁)
(11) 扶桑略記第五(新訂増補国史大系第十二卷七三頁)
(12) 扶桑略記第五(新訂増補国史大系第十二卷七四頁)
(13) 今昔物語集卷二十九(新訂増補国史大系第十七卷九九一頁)
(14) 今昔物語集卷三十一(新訂増補国史大系第十七卷一〇五六頁)

七、おわりに

以上述べきたったことは日本靈異記を主体として、仏教説話の方面から古代における商の一端をながめてきたのであるが、当時の我が国は仏教社会ともいうことができるので、したがって、商経済も仏教、寺院に動かされることが

多かったことといえよう。

市の発展についても、その中に仏教思想による一つの動きともいふべきものがうかがえようし、又出挙にしても、寺院が中心になって、かなり大がかりな金融々通が果されていたことは、当時の寺院の経済力の大きいことを知ることが出来る。

更に錢貨の問題にしても、ここに述べるように寺院の持つ経済力が大きく、その大半が錢貨の持つ力なので、寺院が実にその当時の流通面の一端を背負うていたということがいえるのではなからうか。

最後に遠隔地交易について見れば、檣磐島が大安寺の修多羅衆分錢を借りて、遠く敦賀まで交易に行っていることは単に一つの例にすぎないのであつて、其他多くの寺院においても、その経済力を多分に利用して、交易のための費用を出していたのではなからうか。寺院が自らが商活動をすることができないので、このような形態をとったこととすることも考えることができる。

いずれにせよ、仏教殊に寺院というものが、当時の我国の商活動の上に一つの推進力となったということはこのよしあしを問わず否むことができないと思う。